

第一に考えてくれたことで、父が満足して最期を迎えられたと思うからです」

医師とのズレは、時には患者の側に問題があることもある。高橋美津子さん(66)は、脳梗塞の後遺症による四肢マヒに加え、糖尿病で1年間入院生活を続けているため、背中にひどい床ずれができ、皮膚科の医師から治療を受けていた。熱心な治療でだいぶ安定してきたのだが、今度は足のかかとに黒いものができてきた。

姉の文江さん(70)はこれを床ずれと思い込んでいたが、数日後、足にはぐるぐると包帯が。不安になって医師に尋ねると、

「足の先が黒くなってきました。良い状態ではないですね」

それでも文江さんは、まだ「ひどい床ずれ」と勝手に思い込んでいた。しかし、美津子さんの足は床ずれではなく、糖尿病による「足壊疽」の始まりだった。足に血流が回らなくなり、組

織が死んでしまうため、ひどくなれば、足切断のリスクもある。毎日同様の患者を診ている医師から見れば、

「糖尿病患者であれば足壊疽と気付いて当然」と思ったのだろう。しかし、床ずれと思い込んでいた文江さんはまったく気付かなかった。

それから1週間後、包帯をとると足の指が真っ黒。驚いて医師に詰め寄ると、

## 財源増やして 担い手集めたい

症状はどんどん進行していったのだ。衝撃を受けた文江さんだが、驚いたのは医師も同じ。そんなことは最初から知っていたはずではなかったのかと。これこそ医師と患者のズレだ。

なんとかしてほしいと医師に詰め寄ると、「治療には命のリスクがある。治療するにしても順番があるので、最低でも2週間くらいは待ってもらわなければならない」と

の答え。

「どうして早く処置してくれないのか、正直この時には、医師に不信感を持ちましたね」

そう一人で悩んでいる時に相談に乗ってくれたのが、吉田さんだった。吉田さんは最初にこう言った。

「一人で悩んでいないで、どんな方法があるか、納得できるまで医師に聞いてみたらいいですか。命を守る事が一番というのが大前提だから、医師なら即切斷ということが常識かもしれませんよ」

吉田さんは、医師もちゃんと考えてくれていると言いたかったのだ。この話を聞いて文江さんは医師への不信感が消えていった。

次のアドバイスは「本人の希望を聞く」だった。美津子さんの望みは「リスクがあっても、足切断をしない治療をしてもらいたい」。

とにかく自分の思いをはっきりと伝えよう。文江さんは医師に懇願した。

「2週間なんて待つてられません。一日も早くお願いします。そう駄目もとで伝えてみたんです。医師の答えは「順番ですから」の一点張り。私は妹を助けたい一心で、つい『もし先生のご家族だったら、2週間も待てますか』と言ってしまいました。どう思われてもいい。どうにか妹の思いをかなえてあげたい。必死に食い下がりました」

思いが通じたのか、手術は特例ですぐにしてもらえた。執刀医が自分の休みの時間を割いたのだ。手術は成功、美津子さんは足の切断を免れた。これはどの病院でも通用することではないだろう。一歩間違えばクレームだ。しかし家族を思う本物の熱意は、時として医師を動かす力になる。

「吉田さんは色々な選択肢を示してくださった後、最終的には自分で決めてください。主役はあくまで本人と、本人の意思を伝える家族ですから」と言われま

した。本当にありがたかったですね。結局は全部自分で決めたわけですから、悔いのない選択ができたと思います」

メッセンジャーナースは民間資格で、吉田さんも簡単なお礼程度でサポートしているのが現状だ。しかしどんなに意義ある仕事でも、ほとんど収入のないボランティアでは担い手を集めるのは難しい。実は、そのための財源集めを発案者の村松さんは準備している。

「本格的に動き始めたら、財源を補助する仕組みが必要になってくるでしょうね。保険会社や医療施設、宗教法人など、サポートしてくれそうな機関は色々考えられます。活動の意義を理解してくれる機関が少しずつ出てきています」

もしあなたが「医師とのズレ」を感じ、困っていたら、一人で悩まず、メッセンジャーナースに相談してみたらいいかだろうか。きっと解決の糸口が見つかるはずだ。

《患者とその家族はいずれも仮名》